



皆川泰藏え

民主主義の危機

林 信 雄

わたくし達の国家国民生活は、いま、大きな世界史的試練の時期に当面している。そして、わたくしは、いま、大東亜戦争・太平洋戦争という大きな国家国民的犠牲において収獲した民主主義という生活原理の国民的実践をめぐる、いろいろなことを考えさせられるのである。

その一は、大学人としての感想である。

随

想

わたくしは、昭和十二年秋深まる頃に、母校法学部の研究室と教壇とを追われてから、早稲田大学教授を経て、横浜市立大学教授となり、商学部長、学長職務代理者をも歴任して、今日に及んでいるが、いったい、われわれの国の大学、そして学生生活は、これでよいのであろうかと反省させられる。わずか一握りほどの暴走学生のビケとデモとで卒業式をとりやめるという前代未聞の事態を引き起し、入学式だけは、かろうじて、学長の裏口出入りで事なきをえたという事実に徴表される現在の大学にあって、いまだ大学の自治は失われてはいないというそぶき、ヘルメットと角材による乱舞に浮き身をやつす学生たちは、みずからが学問の徒から暴徒に化身していることを誇らしげに学生生活の自治であると呼号し、そして、教授・学生は、一般的にいつて、無自覚に、無関心に、明けられているという現状、いったいこれが大学の自治であり学生生活の自治なのであるか。母校同志社が、そうでなければ幸いである。反省させられるのである。

その二は、労働行政の体験者としての感

想である。わたくしは、神奈川県地方労働委員会公益委員・会長として、十年有余の間、労使関係の安定化と近代化のために精根をかたむけ、そして今日なお、社団法人近代的労使関係研究協会副会長として、民間人として、努力を重ねているのであるが、近時の労働運動の一部にみる動向に、心ざびしいものをおぼえるのである。法律違反を敢てすることが労働者の幸福を約束するかのごとき錯覚におちいり、階級闘争を呼号することによって民族的共同生活をないがしろにし、国益無視の暴力的言動に明けくれるやに思われる労働運動における好ましからざる動向に、国民の一人として、憤満をすらおぼえるのである。

その三は、法律家としての感想である。わたくしは、現に、労働法担当の司法試験考查委員を委嘱されている法律学者であるが、近時の裁判わけでも下級審裁判にみる偏向化現象については、にがにがしいものをおぼえるのである。民事裁判は、私権相互間の民主主義的調整のうちに、公共の福祉の確保を期すべき国益的作業として、将来に向っての保障を与えることを要請され

るものであって、いわゆる階級的利益のために奉仕すべき筋合のものであってはならない。にもかかわらず、近時の下級審裁判にみる一部の風潮として、日本国憲法とは相容れないイデオロギーとしての共産主義を是認し、共産主義的言動をば表現の自由の権利行使として擁護し、「公共の福祉」をあざわらいつついゆる大衆運動に迎合するかに思わしめる裁判がある。このような裁判の偏向化現象は、なんとしても、その根をたやさねばならない、と反省せしめられるのである。

まことに、民主主義の危機として、国民的奮起の要請されるのは、いまこそである。

(昭4大法卒・横浜市立大学教授)

三十年の振幅

長尾義三

一昨年、同志社の社命により短期の欧米出張をしたが、大部分は曾遊の地で往訪先は主として大学銀行取引所等であった。三十年前の渡欧は文部省在外研究員で二年は

どの期間を与えられたので割に詳しい見聞をなし得たが、今回は三ヵ月の駆け足の旅であった。前回はロンドンまで直行でも五日もかかる船旅で、モンズーンに悩まされたものだが、たまたま住谷先生が渡欧されるのと同船で、この時始めて御目にかかったが、後年同じ同志社で奉職するに至ったのも不思議な御縁である。

英国はさほどでもないがドイツは大戦前後の変わり方が甚しい。ウィルマースドルフの下宿から大学へ通うのにいつも通ったブランデンブルガートアは今は東西の壁となり、ソ連兵が双眼鏡で西側を監視しているのがこちら側からよく見える。西ベルリンを取り巻くマウアーはワンゼーの水上にも境界線を画し、機銃装備の監視艇が常に往来している。これらの壁から自由を求めて脱出しようとして東独兵に射殺された無数の東ベルリン市民を弔う黒旗と花輪、現場写真等が射殺現場の壁際に林立し、同朋を心ならずも殺す悲劇を物語っている。東ベルリンにはまだ戦争で破壊されたままの廃墟が多数残っている一方、戦没ソ連兵の廟所の広袤壮嚴は我朝往古の仁德帝前方後

円陵に劣らない。ドイツ人の感情はどうか。かつてナチ抬頭の頃、SAやSSが肩で風を切り、ユダヤ人迫害が始まり、右翼偏向の国情で心あるドイツ人は定めて不快きわまることだろうと同情したが、直接関係のない外国人として割合のん気な気分だったが、翌年東京へ帰って見ると、暴力思想は先廻りして輸入されて待ちかまえていた。幣原外相の民主的な外交方針への反感や、福本イズムなどのムード的な戦闘的左翼行動への反動として、極右風潮の高まりが昭和三、四年頃から見られたが、満洲事変以外にもアジア大陸各地で関東軍その他の武力闘争が日本国内でこそ公表されていないが外国新聞には事ごとに報道されており、日本に対する世界の世論の風当りは極めて強かった。在外のわが国軍人の鼻息も極めて荒く、駐独大使館付武官など陸海軍競争で本職の外交官をさしおいて潤歩した。アタッシュェの青年将校などの言い草は、親方は日の丸で、勅命といえども聞かざることあるべしなどと豪語していたが、この風潮が二・二六事件を生んだ。

一九三六年二月二十六日朝、欧洲を後に

渡米のためドーヴァー行列車に乘込もうとした時、見送りの友人が今入ったばかりの東京電話を伝えてくれて、青年将校に率いられた叛乱者たちの首相官邸襲撃の報を知った。じらい三十年、世相は相変わらず大きな振幅をもって動反動を繰り返している。近時は公党たる社会党や共産党にすら反対して、マルクシズムの家元を気取る群集がヘルメットと角材とを大学生の制服化しようとしており、これがもつともかも知れないと考えるムードが一般人にある。民主主義の正道は未だ遠いと言わざるを得ない。

(商学部教授・金融論)

二十三年ぶりに

韓国ソウルを尋ねて

柴 原 正 一

私は、大学卒業と同時に元朝鮮銀行に入り、在勤二十有五年に及び、ソウル(京城)に本店があったため、前後十八年間、本店勤務であり、最後は、同行秘書役でピリオドを打ち、引揚げて来た。日韓条約が成立

するまでは、韓国に行くことは、到底、困難であったので行きたくとも行く気も起らず、ほとんどあきらめていたが、本年に入り、はからずも、韓国に行けるチャンスが与えられたので、約二十三年ぶりで、なつかしい韓国ソウルを訪れて来た。ソウルには六日間滞在して遊覧するというよりも、多くの人に出会うこと、かつて勤務したあの石造殿の鮮銀本店を訪れること、朝鮮戦争の被害を受けずに今なお残っていると聞いていた社宅に行つて写真を撮ってくるのと、最後に、在鮮中、拙宅の召使であつた一韓国人の一家を訪ねてくること等に、努力を集中したが、その甲斐あつていづれも果して来た。私事にわたることはさて、多くの人に出会つて感じたことは、今の韓国の老いも若きも北鮮の共産党に対し強い憎しみの感情を抱えていることであつた。これは昭和二十五、六年の朝鮮戦争において、北が南の人たちに対し、暴虐極まる仕業をあえてした憎みからであつて、実に不幸なことであるが、私はさぞかしと首肯したような次第であつた。したがつて、東京都知事的美濃部さんが、北鮮系の朝鮮

大学校の設立許可を与えたことに對し、俄然、韓国政府が日本国政府に抗議するに至つたその間の事理というものは、上記のごとき事情を知る私には、よくわかるが、美濃部知事にはわからないからであつたと思う。私は美濃部知事のとつた措置には反対するものである。

次に感じたことは、韓国は、日夜、三十八度線の国境に立つて共産軍のスパイ等の南下を防止し、いつ何時、起るかも知れない北の挑戦に防備を固めているのである。

私はソウルの宿屋にあって、この現実を静かに考えたとき、観方によつては、韓国は政府予算の三十五%をつかつて、日本に代つて国防の第一線を受持つていてくれていることになるということであつた。もし北が南を攻めて来たとなると、日本の国防というものは、実に不安定なものになるというものであり、ほんとに、考えるとゾットする思いである。この点からして、今後、日本は韓国に對し何をすべきかを考え直す必要に迫られていると思う。

ソウルで校友の三人に出会い、同志社の近状を伝えてきた。出会つた人は金鐘烈

(第一技術団常務理事)、金英浩(淑明女大教授) 尹日輝(建国大学教授)の三人であった。京城女子大の高鳳京女史は、社会的に大きな貢献をしておられるとのことであった。(大10大経卒・経営コンサルタント)

ある自殺

大橋 寛 政

昨年十月、同志社香里の高校二年の生徒が南紀白浜の名勝三段壁から投身自殺した。そのことは当時の二、三の全国紙にものっていた。わたしどもが現場にかけつけたときは、まだ遺体はあがっていなかったが署員の積極的な協力で、到底ダメだろうと思っていた屍が一昼夜も経ないで発見されたことは不幸中の幸いであった。

便箋七、八枚にわたる遺書がのこされていた、その内容はわたしにとってつらいものであった。死の直前に書いたものとしては整いすぎていた。数日前から書いておいたものではないかと思う。

内容はだいたい前後二段にわけられてい

た、前段は漱石の「則天去私」を、死ぬことによって到達できる永遠の世界、と思いきんでいたようだった。彼は漱石を尊敬もし好きでもあったようだ。彼は同志社の中・高に五年間、学んだのであったがキリスト教には無縁のまま死を選んで逝った。

彼は本当にまじめな少年であった。礼拝のときにはいつもチャペルの最前列で、説教者の顔を凝視していたのが印象にのこる。だから求めていたのだ。わたしはそれに応えることなしに大事な時を失ったのだ。彼は祖母の關係で、金光教会にかかわりをもち、その少年会に出るようになってすっかり快活になっていたと担任の先生は言う。学校でのクラブ活動も、学友たちとの交わりも、彼にとっては、何の力にもならなかったのだ。

後段は一そう気になることが記述されていた。彼は読書が好きだったらしいし、教科の勉強にもマジメに取り組んでいた。成績は極上ではなかったにせよ、努力しただけのものはあったという。寸暇を惜しんでモノ読んでいる彼を、周囲の連中はよくヒヤカシたらしい。彼は彼なりに同志社大

学への推薦制度に疑問をもちはじめた。余りマジメでない連中、勉強に何の興味もなさそうな生徒たちも、結構、大学へ苦労知らずに進学している今のシステムに憤りをさえ感じていたフシがうかがわれる。

こんな真面目な少年を死へ追いやった責任は一体誰にあるのか。この学校の責任者としてその環境改善の仕事は、わたしの責務ではなかったのか。わたしはそのためにとれだけの努力を払ったろうか。できなかった原因は何か? その原因を除去することができなかったのか? 私は自問し自答する。全く今の同志社の中高の校長などという仕事は、事情を知らない人は不思議に思うくらい何も出来ない地位なのだ。

キリスト教主義学校とか、教育とかいうのはどういうことなのか。私にはそういうむづかしいことはわからないが、新島先生が眼を開かれたという「それ神はその独り子を賜うほどに世を愛したまへり、すべて彼を信ずる者の亡びずして永遠の生命を得んためなり」の聖句によって教えられるところによれば、「どんな場合にも希望をもって生きていける人間の養成こそがわれらの

使命」ではないのかと思う。もとよりわたくしどもにそれができるなど大それたことは思わない。それをなしたもうのはイエス・キリストの父なる神のみなのだ。新島先生もそれを信じて悟りを開かれたと思う。わたしは教師がもっと神と人との前に謙虚であることが、この学園を少しでも創立者の意図に近くすることだと思う。生徒の死に、前後もなくノボセあがっていたわたしは、これからしばらく頭を冷やしながら壁に向って祈らねばならぬ。

(香里中・高校教諭)

吉岡義睦先生の思い出

井上良吉

吉岡先生が先日おなくなりになった。本当に淋しい限りである。先生は私どもの予科時代には英語の教授として、またその後は彦根高商、大阪市立大学にも教鞭をとられ再び母校に帰って永らく教壇に立たれたようであった。

私が同志社へ入学したのは大正九年の春

で開講初めての英語の時間でまず最初に先生から訳読を当てられたのが私であった。だからそのときのことか私には不思議に忘れられないのである。授業はエッチ・シー・ウエルズの“The Door in the Wall”という短篇であった。初めの出だしから私は今もよく憶えている。それはこうだったと思う。

One confidential evening, not three months ago, Lionel Wallace told me this story of the Door in the Wall.

私は当てられた長い最初の一パラグラフをどうにか訳し終えて席についた。先生は私が最初の One confidential evening を「あるしめやかな夜」と訳したことについて次のような質問があった。「その夜がひっそりして、しめやかであるのか、それともお互に内緒話をし合うのに都会のよい夜であるのか」とどちらであるかと先生はあの美しい眼をかがやかせて少し首を傾けながら私に話しかけられたのであった。私は「ひっそりとした夜です」と答えると先生はその時 COD (Concise Oxford Dictionary) を引きながら「言われたことをは、き

り憶えている。英語をやるには英語の意味を英語で説明してある辞書を引かなければ本当の意味はつかめないと言われた。私はこの時初めて一つ一つの単語の意味も決しておろそかに調べてはならぬものだということを教えられると同時に英語に対する限り無い興味が湧いてくるのをおぼえるようになった。まさに先生のお蔭である。後年私は香里のお宅で先生に久方振りにお目にかかったことがあった。それはもう同志社を出てから三十年近くにもなっていることであつた。私は自分で大切にしまっていたこの入学当時の思い出話を先生の前でしたのであった。その時先生は奇麗な抑揚をつけて

I shot an arrow into the air,

It fell to earth, I knew not where ;

For, so swiftly it flew, the sight

Could not follow it in its flight.

I breathed a song into the air,

It fell to earth, I knew not where ;

For who has sight so keen and strong,

That it can follow the flight of song ?

Long, long afterward, in an oak
I found the arrow, still unbroke;
And the song, from beginning to end,
I found again in the heart of a friend.

Longfellow

を朗読をされ「まあこの詩の境地ですな」と言われた。まさに先生はそう思われたのであろう。先生は今も天国で愛する同志社とその若い学生達を思い出していて下さっておることであろう。

(大14大経卒・京都タワービル企画室長)

近ごろ思うこと

寺岡弘雄

補導課長という柄にもない役を引き受けてから三年目になる。十六時間という講義時間の上での仕事である。よわい不惑を数え私もかすかながら天命らしいものを知られる時節になった。学問に専念したい。時間なき苦しみに熱に浮かされたようになることもある。だがそういう時よく同志社時代の恩師浜田先生の言葉を思い出したり

した。「寺岡君、学者になろうと思つたら、本當の学者にはなれんで」「自分の計画通りに生きようとすればそれだけの人間にしかれないさ。神の摂理にまかせて生きることだよ。」とにかく周囲の事情に押され仕方なしにこの仕事をしているうち、私の人生経験もいくらか広がり、今の学生生活についても考えさせられるようになったことは事実である。それを少し述べてみたい。露骨に言えば、大学にはもはや「生活」がない、あるのは専門的知識の断片と、あとは娯楽だけではなからうかということである。生活のないところに人間性の陶冶ということは考えられない。この傾向はマンモス化した大学ほど強いように見える。大学の「生活」はよき友・よき師とのめぐりあいによって生命を吹き込まれるものだという考えは、年齢と共に私の内部でますます揺ぎないものになっているが、私たちの学生時代は確かにそういうめぐりあいが成立しやすい時代であったのだろう。

生と一對一の演習をやったこともある。学校外でも先生方とは非常に親しく、お宅をしばしば訪問したことはもちろん、北山をいっしょに散策したり、中秋の名月の夜など広沢池あたりまで引張り出したり、下宿に友だちなどを集めそこで聖書の連続講義をしていただいたこともある。じっさいそのような人格的な触れ合いや刺激があったからこそ私などがなりにもギリシア語で聖書を読み得たのだと思う。

しかし問題はもちろんこのような回顧趣味にふけることではなく、すでに大世帯になった大学のなかにこの精神を活かし「めぐりあい」に基づく「生活」を築くには大学をどういう仕組みにしたらいかということである。ソニー厚木工場の記録に信をおくことができると思えば、そこでは組織・機構の巨大化に伴う人間の機械化と官僚制の増大を見事に克服するものとしてのチームワーク体制が誕生しているようで、職場はもはや仕事の能率をあげることが第一の目標ではなく、一人一人が自己の人生と生き甲斐を追求し、人と人とのよき縁を結ぶこと(めぐりあい)を可能にする職場

社会を創造する場となりつつある。能率はそのおのずからなる結果にすぎないというのである。大学こそこのようなことは可能だし、また対決しなければならぬ問題だと思ふ。(昭34大院文博修・美術女子大学助教役)

雛人形雑感

三 諸 聖 子

細々とした物や人形などを好む人は一体に女性らしい人に多いようである。残念ながら私は子供の頃からただ飾っておくだけの人形は好きでなかった。

しかし自分が好まぬとはいえ初節句を迎える娘に雛人形だけは揃えてやらねば申訳けないと、二月の中頃、百貨店へ出掛けてみた。出し入れの簡単な大きな物で、予算は二万円と決めて。一揃五六千から何十万、大ききさままである。が驚いたことにどれもこれも眼がとても大きい。私の古い頭にはこんな人形はうけつけない。なるべく細い眼のをと人形の眼と睨めっこして歩きまわり終には疲れて涙がでてくる。

お雛さんも現代風になったものだと言めて、中でも細いものを選んで帰ったが、どうも気に入らず専門の人形店の一つ四条通りの田中やという店先を覗いてみた。やはり専門店、昔ながらの細い眼の上品な雛が飾ってあった。しかも値二万。雛壇ごと机に飾れそうな大きさ「シメタ」思わずドキドキして店に入り近くの店員の方に「ショウウインドウまで来てもらい、あの二万のがほしい、と指さすと彼女それを見てちょっとためらうように「あの木彫りのでございませうか、お客さまあれは二十二万でございませう」びっくりしてもう一度近視の眼を凝らして正札を見直したら一桁違っていた。二十二万では手が届きません。私近視のものですから、とあわてて断りスゴスゴと退散したが、後になって今更ながら自分の粗忽さが恥かしく、それにつけても立派だったあの店員の方の接客態度、落着いて静かに客に恥をかかせまいとした断り方に頭の下がる思いがした。数日経ってあの店の前を通る機会があったのでそっと覗いてみたが、そこには前のと違人形になっていた。売れたのか？ でもこれまた良い顔をし

ている大ききも前のと同じくらいだ。高いんだらうと値札をみたが一万九千円である今度は何度も零の数を読み直したが間違いない。この前の失敗もあるので恥かしかったがエイとばかり中に入った。この前の人は見えず別の店員さんに、あのウインドウの一万九千円の下さい。あれは陶器でずがと言われた。なるほど安いわけだ陶器ではと考えたが、百貨店の同じ値のよりずつと品もよく気に入っているので荷造りをしてもらった。両手に提げて亀岡のわが家まで、この両手に提げられるほどの大ききにも充分満足させられて。

家で早速荷を解き雛壇ごと文机に置いて母にみてもらった。「フンこれは良いわ。陶器いうからどうもと思つとったけど、そうやけどこれは大人の喜ぶ人形やで、子供は眼の大きい小道具の一杯ついた方を喜ぶで」と言われてハッとした。なるほど最初は殊勝にも娘のために探したのだが、何時のまにやらわが物を買うような気分になっていたことに。まあいい、娘も大きくなればこれらの良さを理解してくれるようになるだろう。

(昭34女高卒)